

概 要

1 調査の目的

この調査は、児童、生徒及び幼児(以下「児童等」という。)の発育及び健康状態を明らかにすることを目的としている。

2 調査事項

児童等の発育状態：身長、体重及び座高

児童等の健康状態：栄養状態、せき柱・胸郭の疾病・異常の有無、視力、聴力、眼の疾病・異常の有無、耳鼻咽喉頭疾患・皮膚疾患の有無、歯・口腔の疾病・異常の有無、結核の有無、心臓の疾病・異常の有無、尿、寄生虫卵の有無、その他の疾病・異常の有無及び結核に関する検診の結果

3 調査の範囲

小学校、中学校、高等学校及び幼稚園のうち、文部科学大臣があらかじめ指定する学校(以下「調査実施校」という。)

4 調査客体

(1) 小学校・中学校

調査実施校に指定された学校の児童・生徒の一部

(2) 高等学校

調査実施校に指定された学校の生徒の一部

ただし、次に掲げる生徒は調査対象者から除く

(ア) 全日制課程及び定時制課程に在籍する満18歳以上の生徒

(イ) 通信制課程の生徒

(3) 幼稚園

調査実施校に指定された幼稚園の5歳児の一部

5 調査の規模

| 区 分 | 学校 総数 | 調査実 施校数 | 児童等総数 (A) | 発育状態調査 対象者数 (B) | 抽出率 B/A(%) | 健康状態調査 対象者数 (C) | 抽出率 C/A(%) |
|-------|----------|------------|--------------|--------------------|---------------|--------------------|---------------|
| 幼 稚 園 | 513 | 35 | 65,877 | 1,418 | 2.2 | 1,786 | 2.7 |
| 小 学 校 | 786 | 60 | 288,579 | 5,719 | 2.0 | 10,885 | 3.8 |
| 中 学 校 | 380 | 40 | 148,863 | 4,757 | 3.2 | 8,331 | 5.6 |
| 高等学校 | 189 | 60 | 151,228 | 2,695 | 1.8 | 4,597 | 3.0 |

* 学校総数及び児童等総数は、平成16年度学校基本調査報告書(文部科学省)による。

6 調査の期日

平成16年4月1日から6月30日までの間に実施された学校保健法による健康診断の結果に基づき調査

7 集計結果

発育状態：文部科学省が集計したもの

健康状態：承認を得て、福岡県が独自に集計したもの

〔利用上の注意〕

(1) 本調査の調査客体数は全国集計で精度を満たす抽出数となっているが、福岡県分のみの集計結果では各年度でかなりの開き(特に健康状態調査)が見られる場合があるため、県分の長期間の傾向を見るための資料にとどめる等、精度面の問題点に留意のうえ活用されたい。

(2) 年齢は、平成16年4月1日現在の満年齢である。

(3) この結果数値は速報であるため、後日文部科学省から公表される確定数値と相違することがある。

1. 発育状態調査結果

(1) 身長

前年度との比較

前年度との比較は表1のとおりである。

身長を前年度の同年齢と比較すると、男子では、5～7歳、10歳、12歳、16歳及び17歳で増加しており、最も増加しているのは、12歳の0.5cmである。その他の年齢では減少しており、最も減少しているのは、9歳の0.9cmである。

女子では、5歳、7歳、8歳及び14歳で増加しており、最も増加しているのは、8歳の0.8cmである。その他の年齢では、6歳、10歳、11歳、13歳、16歳及び17歳で減少しており、最も減少しているのは、10歳及び11歳の0.6cmである。

表1 男女 世代 年齢別 身長の状況

(単位:cm)

| 区分 | 幼稚園 | 小学校 | | | | | | 中学校 | | | 高等学校 | | | |
|----|-----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 5歳 | 6歳 | 7歳 | 8歳 | 9歳 | 10歳 | 11歳 | 12歳 | 13歳 | 14歳 | 15歳 | 16歳 | 17歳 | |
| 男子 | 平成16年度 A | 110.6 | 116.2 | 122.1 | 127.6 | 132.7 | 138.4 | 143.7 | 152.4 | 159.1 | 164.4 | 167.9 | 169.5 | 170.3 |
| | 平成15年度 | 110.3 | 116.1 | 121.9 | 128.0 | 133.6 | 138.2 | 144.2 | 151.9 | 159.6 | 164.9 | 168.1 | 169.2 | 170.0 |
| | 昭和49年度 (親の世代) B | 109.7 | 114.7 | 120.0 | 126.1 | 130.8 | 136.4 | 141.2 | 147.9 | 155.4 | 161.6 | 165.6 | 167.2 | 168.5 |
| | 差 A - B | 0.9 | 1.5 | 2.1 | 1.5 | 1.9 | 2.0 | 2.5 | 4.5 | 3.7 | 2.8 | 2.3 | 2.3 | 1.8 |
| 女子 | 平成16年度 A | 110.0 | 115.6 | 121.6 | 127.7 | 133.3 | 139.6 | 146.5 | 151.8 | 154.6 | 156.5 | 157.0 | 157.2 | 157.0 |
| | 平成15年度 | 109.8 | 115.7 | 121.3 | 126.9 | 133.3 | 140.2 | 147.1 | 151.8 | 154.7 | 156.4 | 157.0 | 157.3 | 157.2 |
| | 昭和49年度 (親の世代) B | 108.9 | 114.2 | 119.6 | 125.5 | 130.8 | 137.0 | 143.3 | 149.4 | 152.7 | 154.6 | 155.5 | 156.8 | 155.9 |
| | 差 A - B | 1.1 | 1.4 | 2.0 | 2.2 | 2.5 | 2.6 | 3.2 | 2.4 | 1.9 | 1.9 | 1.5 | 0.4 | 1.1 |

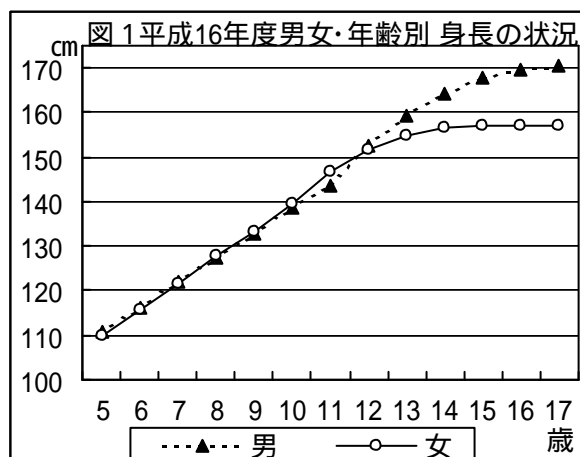
男女の比較

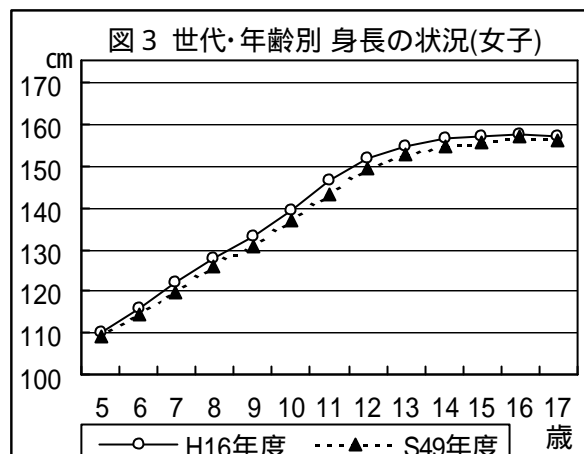
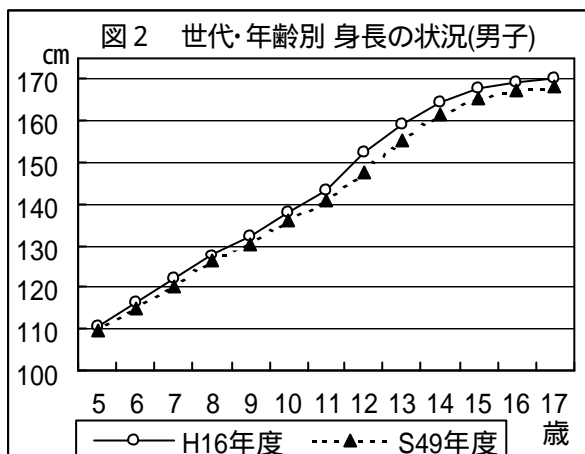
年齢別に男女を比較すると、表1・図1のように8歳から11歳では女子の身長が男子をやや上回っている。これは、前年度に比べ、2歳早くなっている。また、12歳まではほとんど男女差はないが、13歳以降は男子が女子を大きく上回るようになり、差が最大となる17歳では男子の方が13.3cm高くなっている。

親の世代との比較

親の世代(30年前の昭和49年度の数值。以下同じ。)と比べると、表1・図2・図3のように、男女ともすべての年齢区分で親の世代を上回っている。

男子では12歳で4.5cmと差が最大となり、15歳以降では、それぞれ親の世代の1歳上の身長よりも高くなっている。女子では11歳で3.2cmと差が最大となり、13歳で親の世代の14歳と同じになり、14歳では親の世代の16歳にほぼ相当し、さらに15歳で親の世代の16歳及び17歳を上回っている。





年間発育量

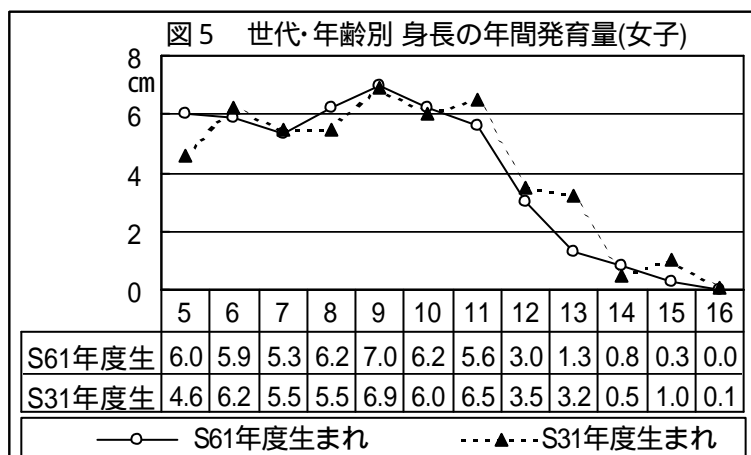
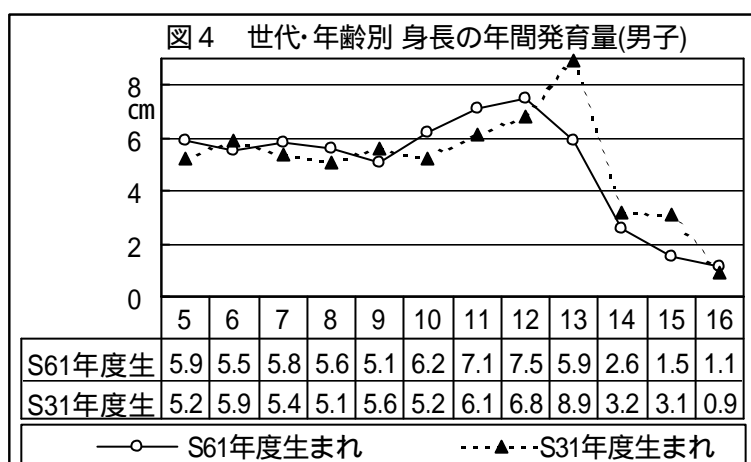
17歳(昭和61年度生まれ)の各年齢における年間発育量をみると、男子では図4のように11歳及び12歳時の発育が著しく、12歳時に最大の発育量(7.5 cm)となっている。

女子では図5のように、8歳から10歳時の発育が著しく、9歳時に最大の発育量(7.0 cm)となり、最大の発育量となった年齢は、男子に比べ3歳早く、前年度と同じ年齢である。

親の世代との比較

親の世代(昭和31年度生まれ)と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は、親の世代よりも1歳早い12歳時となっており、5歳、7歳、8歳、10歳から12歳及び16歳時で親の世代を上回っている。

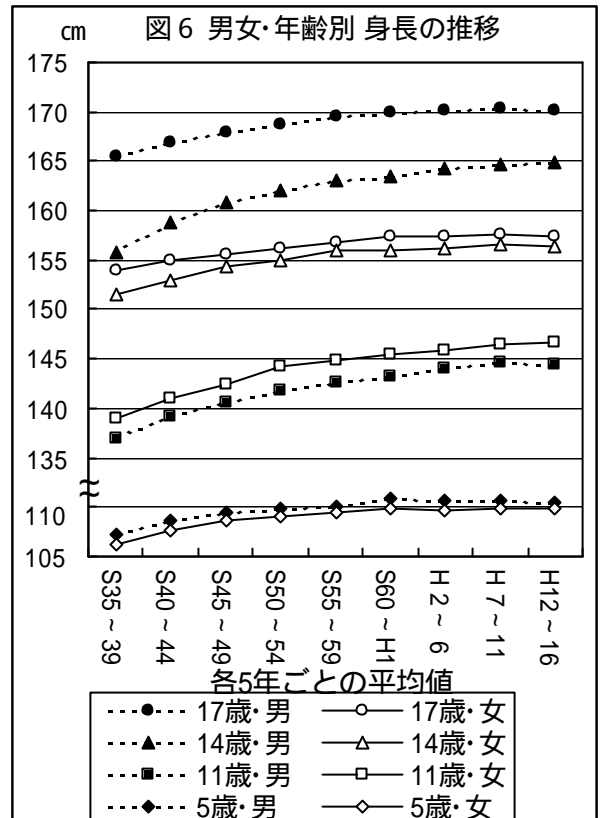
女子では発育量が最大となる時期は親の世代と同じ9歳時となっており、5歳、6歳、8歳から10歳及び14歳時で親の世代を上回っている。



過去45年間の推移

身長推移を、5歳(幼稚園)、11歳(小学校)、14歳(中学校)、17歳(高等学校)の4つの年齢について男女別にみると、図6のとおりである。
(注:5年ごとの平均値を使用。)

全体の傾向をみると、昭和55～59年度を境にして、後半の方が前半よりも伸びの傾斜が緩やかになっている。
最近の動きに注視すると、17歳男女、14歳女子、11歳男子及び5歳男子で前年度区分を下回っている。



(2) 体重

前年度との比較

前年度との比較は表2のとおりである。

体重を前年度の同年齢と比較すると、男子では、12歳及び17歳で増加しており、最も増加しているのは、17歳の0.8kgである。その他の年齢では減少しており、最も減少しているのは14歳の1.3kgである。

女子では、8歳及び16歳で増加しており、最も増加しているのは、8歳の0.8kgである。その他の年齢では、7歳を除いて減少しており、最も減少しているのは、11歳の1.4kgである。

表2 男女・世代・年齢別 体重の状況

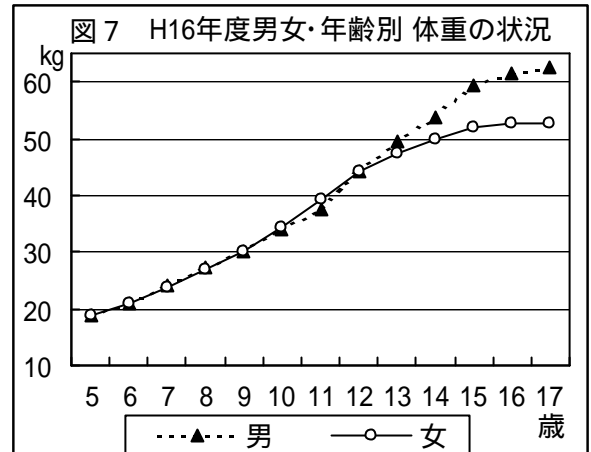
(単位:kg)

| 区分 | 幼稚園 | 小学校 | | | | | | | 中学校 | | | 高等学校 | | |
|----|-----------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 5歳 | 6歳 | 7歳 | 8歳 | 9歳 | 10歳 | 11歳 | 12歳 | 13歳 | 14歳 | 15歳 | 16歳 | 17歳 | |
| 男子 | 平成16年度 A | 18.9 | 21.1 | 24.1 | 27.2 | 30.2 | 34.1 | 37.5 | 44.2 | 49.4 | 53.6 | 59.5 | 61.3 | 62.7 |
| | 平成15年度 | 19.0 | 21.5 | 24.2 | 27.8 | 31.2 | 34.3 | 38.2 | 43.9 | 49.9 | 54.9 | 60.2 | 61.5 | 61.9 |
| | 昭和49年度 (親の世代) B | 18.6 | 20.3 | 22.4 | 25.4 | 27.8 | 31.0 | 34.3 | 39.0 | 44.7 | 50.0 | 54.1 | 56.7 | 58.6 |
| | 差 A - B | 0.3 | 0.8 | 1.7 | 1.8 | 2.4 | 3.1 | 3.2 | 5.2 | 4.7 | 3.6 | 5.4 | 4.6 | 4.1 |
| 女子 | 平成16年度 A | 18.7 | 21.0 | 23.6 | 26.9 | 30.0 | 34.3 | 39.2 | 44.3 | 47.5 | 50.0 | 52.0 | 52.7 | 52.6 |
| | 平成15年度 | 18.8 | 21.1 | 23.6 | 26.1 | 30.8 | 34.8 | 40.6 | 44.6 | 47.7 | 50.3 | 52.2 | 52.6 | 53.1 |
| | 昭和49年度 (親の世代) B | 18.2 | 19.9 | 22.2 | 25.0 | 27.7 | 31.3 | 36.8 | 41.2 | 45.4 | 48.4 | 50.0 | 51.5 | 51.5 |
| | 差 A - B | 0.5 | 1.1 | 1.4 | 1.9 | 2.3 | 3.0 | 2.4 | 3.1 | 2.1 | 1.6 | 2.0 | 1.2 | 1.1 |

下線部分は、昭和24年度以降の記録が残る調査結果うちの最高値

男女の比較

年齢別に男女を比較すると、表2・図7のように、10歳から12歳で女子の体重が男子をやや上回っている。また、13歳まではほとんど男女差はないが、14歳以降は男子が女子を大きく上回るようになり、差が最大となる16歳では男子の方が10.1kg重くなっている。

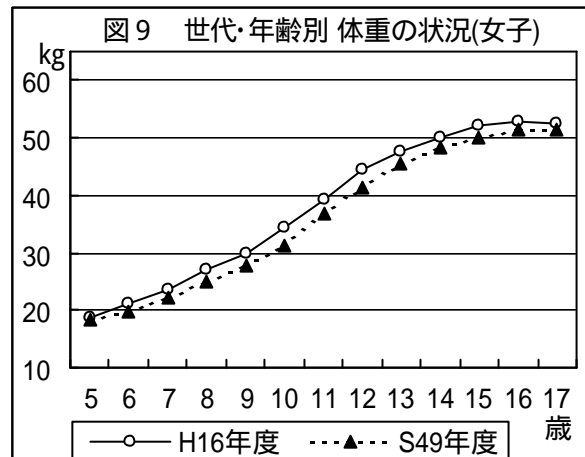
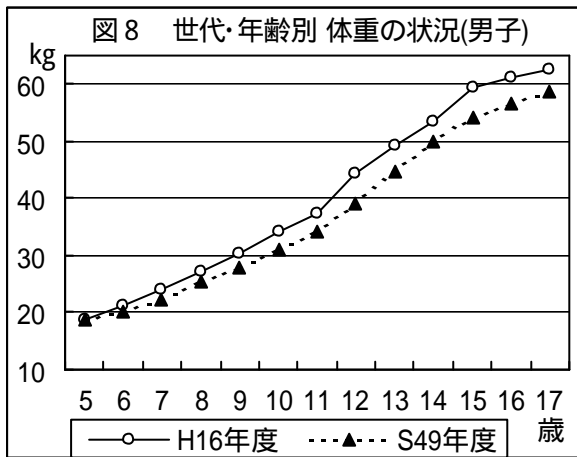


親の世代との比較

親の世代と比べると、表2・図8・図9のように、身長の場合と同様に、男女ともすべての年齢区分で親の世代を上回っている。

男子では15歳で5.4kgと差が最大となり、親の世代の17歳を上回っている。女子では

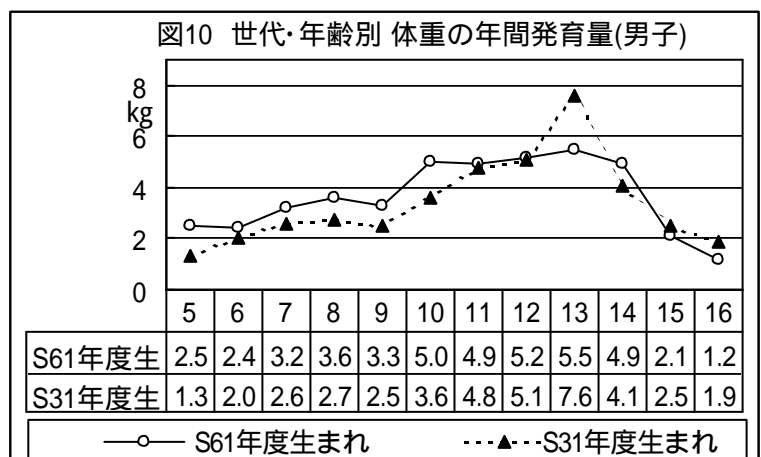
12歳で3.1kgと差が最大となり、14歳では親の世代の15歳と同じになり、さらに15歳では、男子と同様、親の世代の17歳を上回っている。



年間発育量

17歳(昭和61年度生まれ)の各年齢における年間発育量をみると、男子では図10のように12歳及び13歳時の発育が著しく、13歳時に最大の発育量(5.5kg)となり、最大の発育量となった年齢は、前年度よりも1歳遅くなっている。

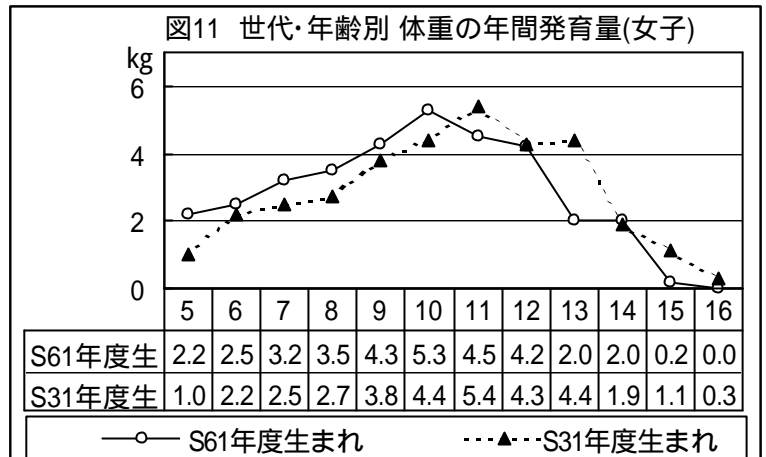
女子では図11のように、9歳から12歳時の発育が著しく、10歳時に最大の発育量(5.3kg)となり、最大となった年齢は、男子に比べ3歳早く、前年度と同じ年齢である。



親の世代との比較

親の世代の17歳(昭和31年度生まれ)と比較すると、男子で発育量が最大となる時期は、親の世代と同じ13歳時となっており、5歳から12歳及び14歳時では親の世代を上回っている。

女子では発育量が最大となる時期は、親の世代より1歳早い10歳時で、5歳から10歳及び14歳時で親の世代を上回っている。

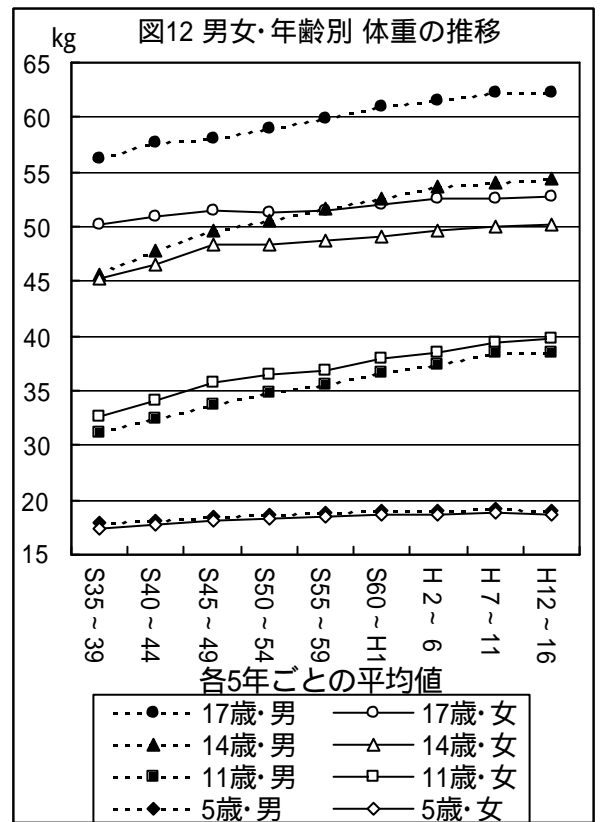


過去45年間の推移

体重の推移を、5歳(幼稚園)、11歳(小学校)、14歳(中学校)、17歳(高等学校)の4つの年齢について男女別にみると、図12のとおりである。

(注:5年ごとの平均値を使用。)

全体的な傾向をみると、身長の場合とは異なり、体重では5歳の男女がほぼ横ばい状態であるのを除き、他の区分では、平成12～16年度で、11歳男子が7～11年度を下回ったものの、全体を通して増加傾向にある。



(3) 座高

前年度との比較

前年度との比較は表3のとおりである。

座高を前年度の同年齢と比較すると、男子では、5～7歳、10歳、12歳及び15～17歳で増加しており、最も増加しているのは17歳の0.4cmである。16歳及び17歳では過去最高となっている。その他の年齢では14歳を除いて減少しており、最も減少しているのは、8歳及び9歳の0.5cmである。

女子では、6歳、8歳、9歳、12歳、14歳、15歳及び17歳で増加しており、最も増加しているのは8歳の0.7cmである。14歳では過去最高となっている。その他の年齢では10歳、11歳で前年度より減少しており、最も減少しているのは、11歳の0.4cmである。

表3 男女・世代・年齢別 座高の状況

(単位:cm)

| 区分 | 幼稚園 | 小学校 | | | | | | 中学校 | | | 高等学校 | | | |
|----|-----------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 5歳 | 6歳 | 7歳 | 8歳 | 9歳 | 10歳 | 11歳 | 12歳 | 13歳 | 14歳 | 15歳 | 16歳 | 17歳 | |
| 男子 | 平成16年度 A | 62.0 | 64.8 | 67.6 | 70.0 | 72.4 | 74.9 | 77.1 | 81.2 | 84.7 | 87.6 | 89.7 | 90.7 | 91.3 |
| | 平成15年度 | 61.9 | 64.7 | 67.5 | 70.5 | 72.9 | 74.7 | 77.4 | 80.9 | 84.8 | 87.6 | 89.6 | 90.4 | 90.9 |
| | 昭和49年度 (親の世代) B | 62.2 | 64.3 | 66.7 | 69.5 | 71.5 | 73.6 | 75.7 | 79.4 | 83.0 | 86.0 | 88.7 | 89.7 | 90.5 |
| | 差 A - B | -0.2 | 0.5 | 0.9 | 0.5 | 0.9 | 1.3 | 1.4 | 1.8 | 1.7 | 1.6 | 1.0 | 1.0 | 0.8 |
| 女子 | 平成16年度 A | 61.5 | 64.7 | 67.3 | 70.4 | 72.9 | 75.8 | 79.2 | 82.1 | 83.5 | 84.7 | 85.3 | 85.2 | 85.2 |
| | 平成15年度 | 61.5 | 64.5 | 67.3 | 69.7 | 72.8 | 76.1 | 79.6 | 82.0 | 83.5 | 84.4 | 85.0 | 85.2 | 84.9 |
| | 昭和49年度 (親の世代) B | 61.4 | 63.8 | 66.4 | 69.1 | 71.6 | 74.0 | 77.3 | 81.2 | 83.1 | 84.3 | 84.8 | 85.5 | 85.0 |
| | 差 A - B | 0.1 | 0.9 | 0.9 | 1.3 | 1.3 | 1.8 | 1.9 | 0.9 | 0.4 | 0.4 | 0.5 | -0.3 | 0.2 |

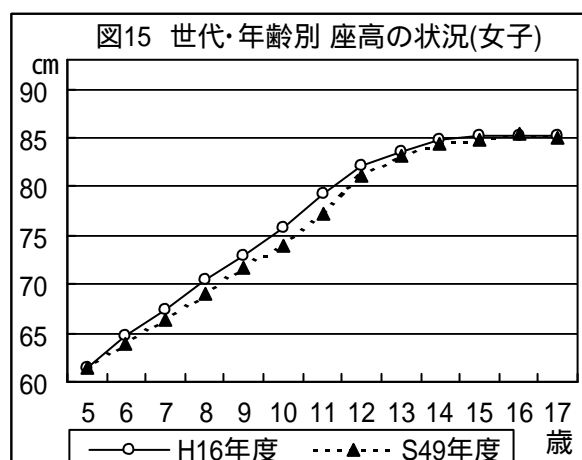
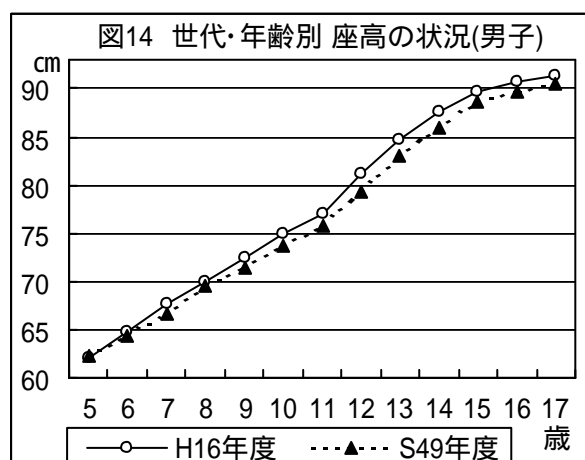
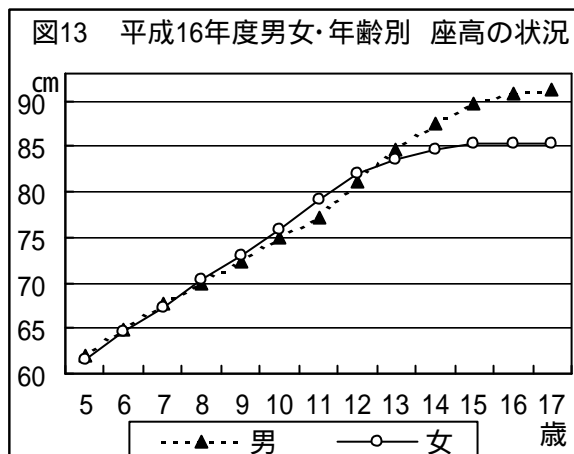
下線部分は、昭和25年度以降の記録が残る調査結果うちの最高値

男女の比較

年齢別に男女を比較すると、表3・図13のように、8歳から12歳では女子の座高が男子をやや上回っている。また、13歳まではほとんど男女差はないが、14歳以降は男子が女子を大きく上回るようになり、差が最大となる17歳では男子の方が6.1cm高くなっている。

親の世代との比較

親の世代と比べると、表3・図14・図15のように、5歳男子及び16歳女子を除く年齢区分で親の世代を上回っている。男子では12歳で1.8cmと差が最大となり、15歳で親の世代の16歳と同じになり、さらに16歳で親の世代の17歳を上回っている。女子では11歳で1.9cmと差が最大となり、14歳以降では、親の世代の1歳上の座高に近くなっている。



2. 健康状態調査結果

調査客体数(抽出)は全国集計で精度を満たすように設定されているが、福岡県の単年度分のみを集計結果では、各年度ごとの数値にかなりの開きが見られる場合がある。このため、精度を高めるため、疾病・異常のある者の割合の5年間の平均を使用することとした(ただし、裸眼視力については、検査実施率が低い幼稚園及び集計方法が異なる昭和53年度以前は除く。)。以下、疾病・異常のある者の割合が調査項目中、最も高い「むし歯(う歯)」と次に高い「裸眼視力1.0未満」及び「ぜん息」と「肥満傾向」について記述する。

(1) むし歯(う歯)

過去30年間の推移

平成12～16年度のむし歯の者の割合(治療済みの歯がある者(以下、処置完了者という。)を含む。)は、幼稚園61.42%、小学校74.90%、中学校70.91%、高等学校81.11%と、全調査項目中で最も高率となっている。

過去30年間の推移をみると、図16・表4のように、幼稚園・小学校では、昭和50～54年度以降一貫して低下している。中学校・高等学校では、昭和55～59年度にいったん上昇したが、以降低下している。

また、昭和50～54年度からの低下幅を各学校種別にみると、幼稚園で29.38ポイント、小学校で21.38ポイント、中学校で23.10ポイント、高等学校で13.68ポイントとなっており、幼稚園で特に低下幅が大きくなっている。平成7～11年度からの低下幅は、幼稚園11.06ポイント、小学校で8.79ポイント、中学校で12.58ポイント、高等学校で10.02ポイントと全学校種別で最大となっている。

未処置歯(治療が必要であるにもかかわらず治療を行っていないむし歯)のある者の割合も、昭和55～59年度を境に、全学校種別で低下してきており、特に低下が著しい幼稚園では、昭和50～54年度の76.57%に比べ、平成12～16年度では半分以上の37.32%に減少している。

また、処置完了者(むし歯の者から未処置歯のある者を差し引いた)の割合は、幼稚園・小学校では未処置歯のある者の割合を下回っているが、中学校・高等学校では上回っている。

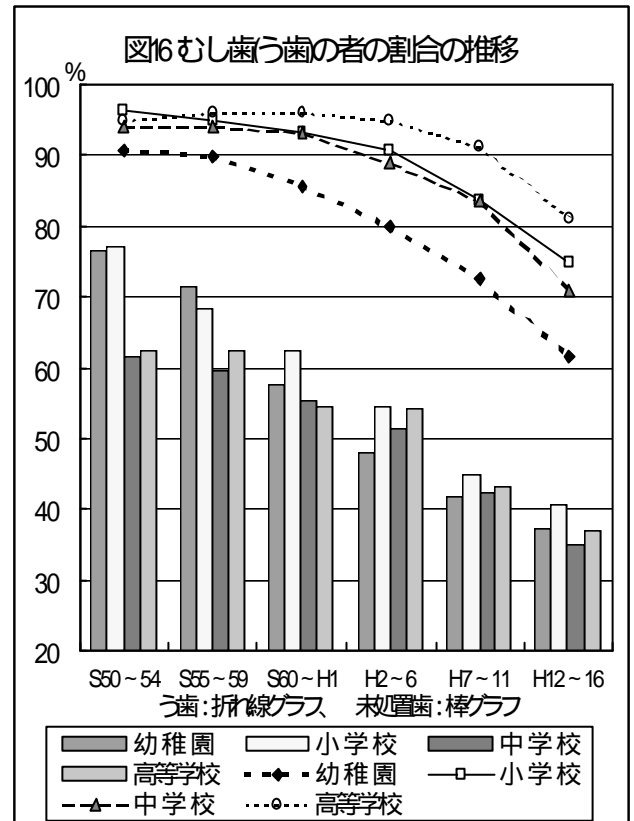


表4 むし歯(う歯)の者の割合の推移

(単位：%)

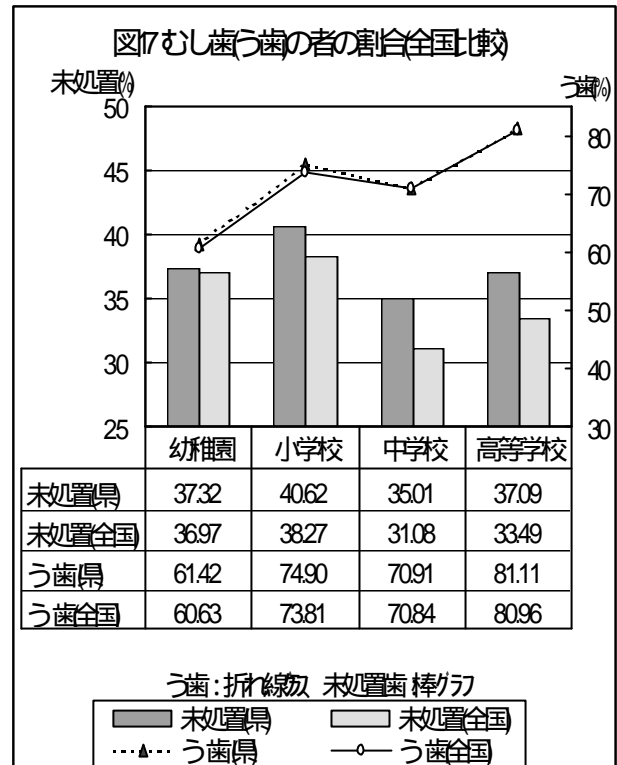
| 区分 | | S50～54 | S55～59 | S60～H1 | H2～6 | H7～11 | H12～16 |
|------|-----------|--------|--------|--------|-------|-------|--------|
| 幼稚園 | むし歯(う歯)の者 | 90.80 | 89.96 | 85.66 | 79.94 | 72.48 | 61.42 |
| | 未処置歯のある者 | 76.57 | 71.49 | 57.52 | 47.96 | 41.64 | 37.32 |
| | 処置完了者 | 14.23 | 18.47 | 28.15 | 31.98 | 30.84 | 24.09 |
| 小学校 | むし歯(う歯)の者 | 96.28 | 94.85 | 93.30 | 90.64 | 83.69 | 74.90 |
| | 未処置歯のある者 | 77.17 | 68.26 | 62.32 | 54.46 | 44.97 | 40.62 |
| | 処置完了者 | 19.11 | 26.59 | 30.98 | 36.18 | 38.72 | 34.29 |
| 中学校 | むし歯(う歯)の者 | 94.01 | 94.15 | 93.19 | 89.06 | 83.49 | 70.91 |
| | 未処置歯のある者 | 61.47 | 59.60 | 55.36 | 51.50 | 42.27 | 35.01 |
| | 処置完了者 | 32.55 | 34.55 | 37.83 | 37.57 | 41.22 | 35.90 |
| 高等学校 | むし歯(う歯)の者 | 94.79 | 95.97 | 95.94 | 94.99 | 91.13 | 81.11 |
| | 未処置歯のある者 | 62.32 | 62.42 | 54.51 | 54.18 | 43.26 | 37.09 |
| | 処置完了者 | 32.47 | 33.55 | 41.43 | 40.82 | 47.87 | 44.02 |

全国との比較

平成12～16年度のむし歯の者の割合を全国と比較したところ、図17のように、全学校種別で全国を上回っている(幼稚園で0.79ポイント、小学校で1.09ポイント、中学校で0.07ポイント、高等学校で0.15ポイント)。

未処置歯のある者の割合も同様に、全学校種別で全国を上回っている(幼稚園で0.35ポイント、小学校で2.35ポイント、中学校で3.93ポイント、高等学校で3.60ポイント)。

処置完了者の割合は、幼稚園では全国を上回っているが、他の学校種別では全国を下回っている。

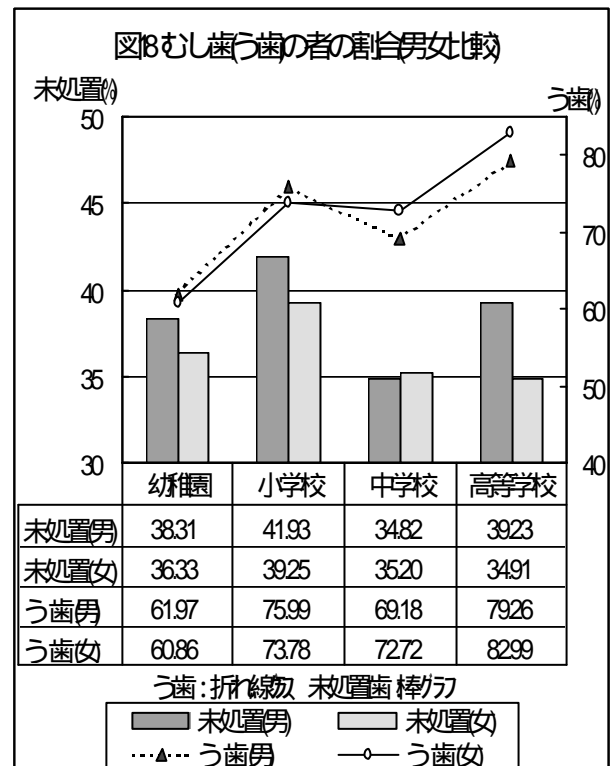


男女の比較

男女別にみると、図18のように、小学校までは男子が女子を上回っている(幼稚園1.11ポイント、小学校2.21ポイント)が、中学校以降は逆に女子が男子を上回っている(中学校3.54ポイント、高等学校3.73ポイント)。

未処置歯のある者の割合は、中学校を除く学校種別では男子が女子を上回っている(幼稚園1.98ポイント、小学校2.68ポイント、高等学校4.32ポイント)。

処置完了者の割合は、男子では高等学校時に未処置歯のある者の割合を上回るが、女子では男子より早く、中学校時には既に上回っている。



(2)裸眼視力1.0未満

過去25年間の推移

平成12～16年度の裸眼視力1.0未満の者の割合は、小学校28.80%、中学校48.43%、高等学校65.76%であり、調査項目中、むし歯(う歯)に次いで2番目の高率となっている。

過去25年間の推移をみると、図19・表5のように、小学校・中学校では、昭和55～59年度以降上昇していたが、平成12～16年度では平成7～11年度に比べ、小学校で0.24ポイント、中学校で3.41ポイント低下した。しかし、高等学校では、昭和55～59年度以降一貫して上昇しており、昭和55～59年度に比べ、平成12～16年度では13.77ポイント上昇している。

また、裸眼視力1.0未満の者の中で特に視力が弱い裸眼視力0.3未満の者の割合をみると、図28のように、裸眼視力1.0未満の者と同様、小学校・中学校ともに、昭和55～59年度以降上昇していたが、平成12～16年度では前年度区分に比べ、小学校で0.44ポイント、中学校で2.42ポイント低下した。高等学校では、昭和55～59年度以降一貫して上昇しており、昭和55～59年度に比べ、平成12～16年度では10.63ポイント上昇している。

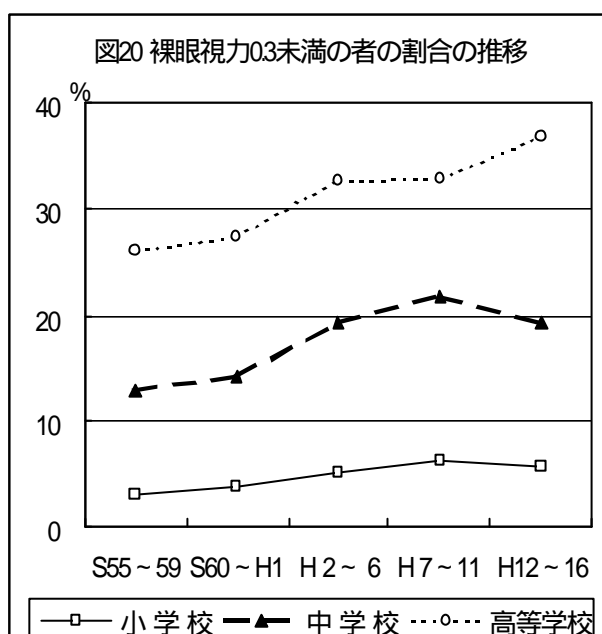
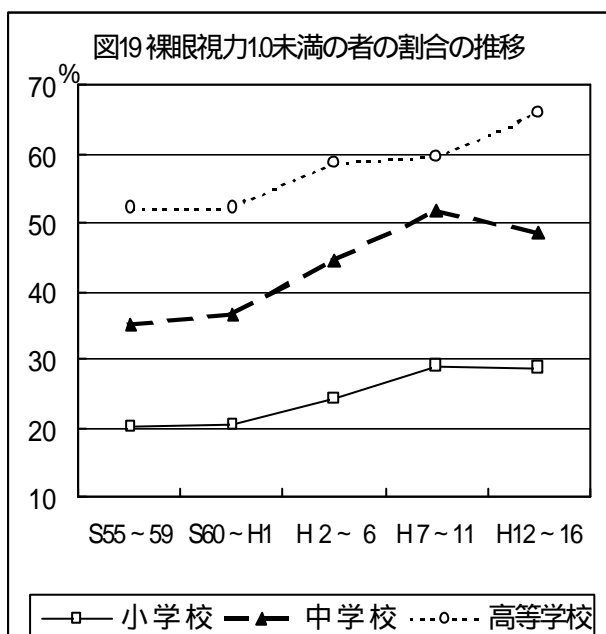


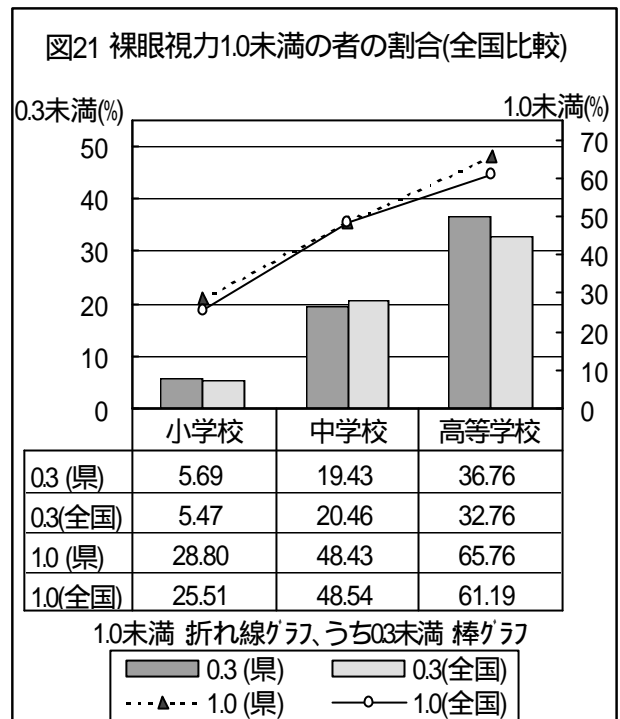
表5 裸眼視力1.0未満の者の割合の推移

(単位：%)

| 区分 | | S55～59 | S60～H1 | H2～6 | H7～11 | H12～16 |
|------|------------|--------|--------|-------|-------|--------|
| 小学校 | 裸眼視力1.0未満 | 20.26 | 20.58 | 24.24 | 29.04 | 28.80 |
| | 1.0未満0.7以上 | 10.95 | 10.28 | 10.74 | 12.58 | 12.81 |
| | 0.7未満0.3以上 | 6.26 | 6.57 | 8.51 | 10.33 | 10.31 |
| | 0.3未満 | 3.05 | 3.74 | 4.99 | 6.13 | 5.69 |
| 中学校 | 裸眼視力1.0未満 | 34.99 | 36.45 | 44.33 | 51.84 | 48.43 |
| | 1.0未満0.7以上 | 10.06 | 10.07 | 9.95 | 12.71 | 11.76 |
| | 0.7未満0.3以上 | 12.16 | 12.35 | 15.08 | 17.28 | 17.23 |
| | 0.3未満 | 12.77 | 14.03 | 19.29 | 21.85 | 19.43 |
| 高等学校 | 裸眼視力1.0未満 | 51.99 | 52.08 | 58.58 | 59.62 | 65.76 |
| | 1.0未満0.7以上 | 10.75 | 9.96 | 10.23 | 10.19 | 12.70 |
| | 0.7未満0.3以上 | 15.11 | 14.65 | 15.74 | 16.54 | 16.29 |
| | 0.3未満 | 26.13 | 27.47 | 32.60 | 32.89 | 36.76 |

全国との比較

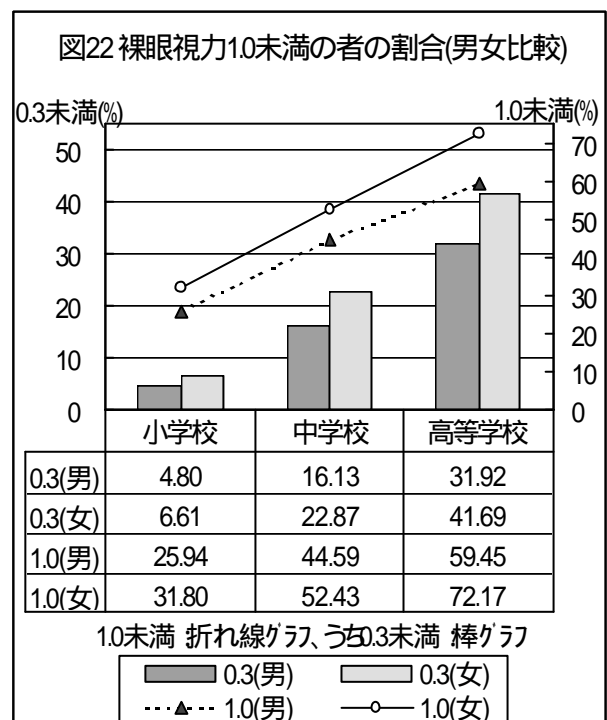
平成12～16年度の裸眼視力1.0未満の者の割合を全国と比較したところ、図21のように、小学校と高等学校で全国を上回って(小学校3.29ポイント、高等学校で4.57ポイント)、中学校では全国を下回っている(0.11ポイント)。また、裸眼視力0.3未満の者の割合も同様に、小学校と高等学校で全国を上回って(小学校で0.22ポイント、高等学校で4.00ポイント)、中学校では全国を下回っている(1.03ポイント)。



男女の比較

平成12～16年度の裸眼視力1.0未満の者の割合を男女別にみると、図22のように、全学校種別で女子が男子を上回っており(小学校5.86ポイント、中学校7.84ポイント、高等学校12.72ポイント)、女子と男子の差は、進学するに伴い、拡大していく傾向にある。

裸眼視力0.3未満の者の割合も同様に、全学校種別とも女子が男子を上回っており(小学校1.81ポイント、中学校で6.74ポイント、高等学校で9.77ポイント)、女子と男子の差は、進学するに伴い、拡大していく傾向にある。



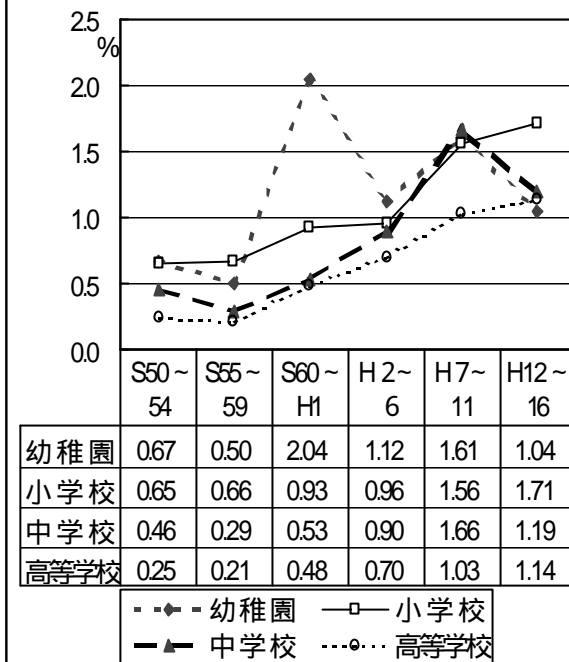
(3) ぜん息

過去30年間の推移

平成12～16年度のぜん息の者の割合は、幼稚園1.04%、小学校1.71%、中学校1.19%、高等学校1.14%となっている。

過去30年間の推移をみると、図23のように、幼稚園では、隔年度間ごとに増減を繰り返しており、平成12～16年度は平成7～11年度に比べ、0.57ポイント低下している。小学校では、昭和50～54年度より一貫して上昇傾向にあり、平成12～16年度は昭和50～54年度に比べ、1.06ポイント上昇している。中学校では、昭和55～59年度にいったん低下し、その後上昇傾向にあったが、平成12～16年度では再び低下し、平成7～11年度に比べ、0.47ポイント低下している。高等学校では、昭和55～59年度にいったん低下したものの、その後上昇傾向にあり、平成12～16年度は最も低率であった昭和55～59年度に比べ、0.93ポイント上昇している。

図23 ぜん息の者の割合の推移



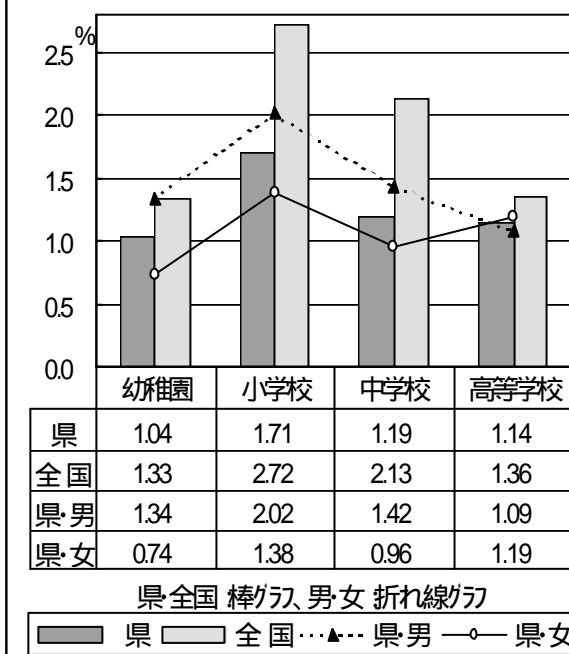
全国との比較

平成12～16年度のぜん息の者の割合を全国と比較したところ、図24の棒グラフのように、全学校種別で全国を下回っている(幼稚園0.29ポイント、小学校1.01ポイント、中学校0.94ポイント、高等学校で0.22ポイント)。

男女の比較

男女別にみると、図24の折れ線グラフのように、幼稚園、小学校、中学校では男子が女子を上回っており(幼稚園0.60ポイント、小学校0.64ポイント、中学校で0.46ポイント)、高等学校では逆に女子が男子を上回っている(0.10ポイント)。

図24 ぜん息の者の割合(全国・男女比較)

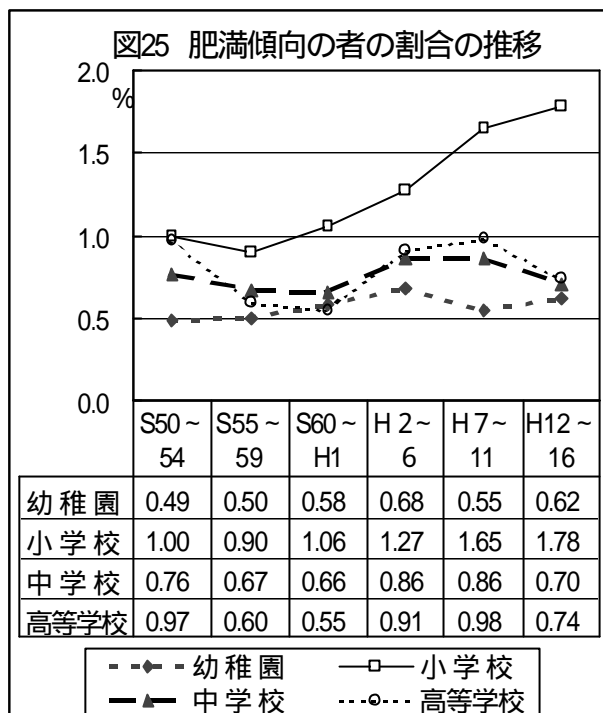


(4)肥満傾向

過去30年間の推移

平成12～16年度の肥満傾向の者(学校医から肥満傾向と判定された者)の割合は、幼稚園0.62%、小学校1.78%、中学校0.70%、高等学校0.74%となっている。

過去30年間の推移をみると、図25のように、幼稚園では、昭和50～54年度以降上昇していたが、平成7～11年度にいったん低下し、平成12～16年度では平成7～11年度に比べ、0.07ポイント上昇した。小学校では、昭和55～59年度いったん低下したが、その後は一貫して上昇しており、平成12～16年度は最も低率であった昭和55年度～59年度に比べ、0.88ポイント上昇した。中学校では、昭和60～平成1年度まで低下していたが、2～6年度に上昇したが、平成7～11年度は横ばい、平成12～16年度では平成7～11年度に比べ、0.16ポイント低下した。高等学校では、昭和60～平成1年度まで低下し、その後上昇したが、平成12～16年度は平成7～11年度に比べ0.24ポイント低下した。



全国との比較

平成12～16年度の肥満傾向の者の割合を全国と比較したところ、図26の棒グラフのように、幼稚園では上回っている(0.02ポイント)が、小学校、中学校、高等学校では全国を下回っている(小学校0.84ポイント、中学校1.13ポイント、高等学校0.74ポイント)。

男女の比較

男女別にみると、図26の折れ線グラフのように、幼稚園、小学校、中学校では男子が女子を上回り(幼稚園0.37ポイント、小学校1.02ポイント、中学校では0.30ポイント)、逆に、高等学校では女子が男子を上回っている(0.23ポイント)。

